

さまざまな国での生活が 生きるための 知恵とたくましさをもたらした

山川さんの幼少期のエピソードは本文に譲るが、語学に堪能で、米国の大学でアントレプレナーシップ教育の先頭を走り、内外で高い評価を得ている源は、少し特別な成育環境にあったのではないかと尋ねてみた。成育環境は特別だったかもしれないが、もともとほかの人と違うことをするタイプだったこともその理由の一つではないかと話してくれた。みんながNIKEなら自分はAdidasとか。それで失敗することもあったが、そうすることで、ほかの側面を見ることができたと山川さんは語る。あまのじゃくの視点も大事なのだ。

(本紙主幹・奥田芳恵)

スケート靴を 履いたこともないのに アイスホッケーチームに

奥田 山川さんは、幼い頃からいろいろな国で暮らす経験をされたと聞いています。どんなお子さんだったのでしょうか。

山川 私は日本を含めて8カ国で生活したことがあり、物心つかないうちから何十回も引っ越しをしているので、新しい人と出会って仲良くなったり、何かを立ち上げたりすることは得意だったのだと思います。ただ、大きくなっていくにつれて、あまり友人や周りの人たちに感情移入できなくなったということもありました。

奥田 それはどうして？

山川 最初のうちは、引っ越しするたびに友だちと別れるのがつらくて、いつも泣いていたそうです。でも、そのうち泣かなくなっただけですね。それは友人との関係性に深入りしなくなったからです。別れのつらさを回避するために、あまり親密な友だちをつくらなかったり、友人関係に固執しなくなったからではないかと、大人になってから親から慰め

られたりしましたが、自分としては生きていくのに精いっぱいという側面もありました。

奥田 引っ越すたびに、生活環境も大きく変わりますものね。

山川 例えばブラジルに行ったとき、ポルトガル語など誰もしゃべれないわけです。でも、幼かった私のほうが言葉を身に付けるのが早かったため、ポルトガル語を両親に通訳してあげていたと聞きました。その後、英語圏のバンクーバーに移住して英語の語学学校に入っても、やはり最初はしゃべれません。そこで覚えているのは、辞書を持って行って「stomach ache (お腹が痛い)」のところを先生に見せて自分の状況を伝えたことでした。

奥田 小さなうちから、そういう知恵やたくましさを身に付けられたのですね。

山川 生きていく術として、語学を身に付けなければならなかったということです。そして、対人関係ですね。とにかく言葉の通じない相手と意思疎通を図るために、サッカーや野球などのスポーツ、ボディランゲージを通じて仲良くなるといったことは、その後、みんなをまとめて何かをすることに役立ったと思います。

奥田 お父さまは、どんなお仕事をされていたのですか。

山川 地質学の博士号を持っていて、登山家でもありました。





PROFILE 慶應義塾大学法学部卒。米ピーター・ドラッカー経営大学院にて経営学修士（MBA）課程修了。テキサス州立大学ダラス校にて国際経営学博士号（Ph.D.）取得。2009年度からバブソン大学准教授。専門領域はアントレプレナーシップ。バブソン大学では、起業道、失敗学、経営戦略、国際ビジネスを教える。東京大学特任教授をはじめ、日本でも多くの大学で教壇に立つ。CICジャパンプレジデント、ベンチャーカフェ東京代表理事、経済産業省J-Startup推薦委員、文部科学省起業教育有識者委員会メンバーなどを歴任。著書に『バブソン大学で教えている 世界一のアントレプレナーシップ』（講談社）などがある。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi

撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2026.6.22 ／東京都千代田区のBCNにて

奥田 だから、いろいろな国々を巡っていたのでしょうか。

山川 当時は自分の生活が忙しく、頻繁に引っ越しする理由を尋ねることはありませんでしたが、もしかしたら、登ったことのない山に登るために、その土地に移り住んで地質学の講義をしていたのかもしれないね。

奥田 お父さまは、子どもの頃の山川さんにどのように接していच्छやいましたか。

山川 バンクーバーに引っ越したとき、最初にアイスホッケーの試合を見に行きました。北米プロリーグの決勝戦だったため、とても盛り上がり「わー、すごい！」とそのプレーに引き込まれていたら、父が「恭弘、アイスホッケーをやってみるか？」と。「やってみたい！」と答えると、翌週にはチームに入っていました。でも、ルールも分からず、スケート靴を履いたこともないため、最初の試合のときなど立っていられないんです。

奥田 いきなりアイスホッケーチームに？

山川 アイスホッケーはカナダの国技なので、いくら下手でも、チームに入ってプレーすることができます。その後、どんどん上達して日本に戻ったときは国体の選手にまでなったのですが、最初は、父親に防具をつけてもらって「行ってこい！」と。そのままリンクに送り出された記憶だけが残っています。

奥田 そういお父さまの教育方針は、山川さんにどんな影響を与えましたか。

山川 崖から子を突き落とすライオンの話ではありませんが、「とにかくやってみろ！」という父のやり方は、自分の行動力につながっていったのだと思います。ただ、父から「ああしろ、こうしろ」と干渉された記憶はなく、親子といえども、お互いに個人として尊重しあっていたと思います。

一本の電話から生まれた大切な縁とバブソンとの出会い

奥田 改めてうかがいますが、山川さんはなぜバブソン大学で教えられているのでしょうか。

山川 私のキャリアの中で一番長いのがバブソンで、今年で16年目になります。それまでは、ロサンジェルス、クリーブランド、ダラスなどを転々としたましたが、チャレンジしている人がたくさん集まるボストン、バブソンは飽きないんですね。

奥田 どんな縁で、この大学に出会われたのですか。

山川 MBAを取得した後、それだけでは物足りなくて博士号を取りたいと考えていました。このとき、起業やアントレプレナーシップについてもっと知りたいと思ったのです。日本の書店にはそうし

こぼれ話

日本でも多くの大学で教壇に立つ山川恭弘さん。夏の講義などに合わせて来日した貴重な時間を対談に充ててもらうことができました。アントレプレナーシップも失敗学も、どちらも自分にとっては必要不可欠なテーマだ。1対1で直接お話できる贅沢な機会に、いろいろと学びたいなと期待が膨らむ。対談と言いながら、少し学生のような気分だ。

長い道のりの千人回峰。まだ400人かと思うか、あと600人とお会いできると思うか、自分次第だ。山川さんは、これからの貴重な600人との出会いを「素晴らしい」と言ってくださった。そして「道中を楽しんで」と。見えない長旅のゴールと、「人とは何ぞや」という壮大すぎるテーマに少し弱気になっていたかもしれない、と自分の深層心理に気付いた。ゴールや結果を急ぐ気持ちはあまり意味がない。一人一人との対談にどっぷり浸かって、何を思い、感じるか、ありのまま受け止め楽しんでいこうと思う。

以前、創業者の奥田喜久男と経営者にとっての失敗について会話したことがある。「全てが血肉になるから、あまり失敗という表現はそぐわないね」というのが、お互いの考えで共通していた。もちろん、短期的にみれば失敗と言えるものはあるのだろうけれど、今もその考えは大きくは変わっていない。ただ、「仲間を道連れにしてしまったとき」は、失敗だろうと今は思っている。だからこそ、「チームで失敗の定義を統一すること、許



容できるロスを決めることが重要なのだ」と山川さんの言葉が腑に落ちる。どこまで失っていいかをあらかじめ決めておけば、少なくとも撤退に勇気など必要なく、ポジティブに次の一手が打てる。そのためには、やはり「失敗は当たり前」という前提を持っていることが大切だ。

AI時代は知の探究がより重要になってくる、と山川さんはおっしゃられた。私たちは失敗から学び、それを新たな挑戦のエネルギーに変えることができる。新しいことにチャレンジする勇気や覚悟を持つことができるのは、より人間らしい働きの一つなのではないか。失敗を歓迎するのはまだ難しい気持ちもあるが、失敗は当たり前という前提に立てれば、「また強くなったじゃん」とか「次に行けるね」という気持ちで前に進める。再び山川さんにお会いできた時には、どれくらい強く思っているだろうか、「Failure is good」を。

（奥田芳恵）

たテーマの本がまったくない時代です。起業家になるのではなく、アントレプレナーシップの理論と実践を融合したかたちで学びたいと、いろいろな大学の先生に電話をして相談しようと思いました。

奥田 いきなり電話ですか。

山川 ことごとく断られる中で、当時、一橋大学の学長をされていた竹内弘高さんだけは、見ず知らずの私の相談に乗ってくださったんです。帝国ホテルの喫茶室に呼ばれ、初めは、5分か10分話して激励してくれるくらいだと思っていたのですが、2時間近くじっくり話を聞いてくれました。

奥田 それはすごいお話ですね。

山川 竹内さんは「アントレプレナーシップはまだ日本にないから米国に行け。米国に行ったらバブソンという大学があるからそこで働け。そこで身を立てたら二度と日本に帰ってくるな」とおっしゃいました。ただ、その後の博士号取得のプロセスはとてもハードで、しばらくはバブソンのことも忘れていたほどでした。

けれども、その後、要所要所で竹内さんと出会い、バブソンに行ってからいろいろと教えていただいたり、救っていただいたりしました。

奥田 一本の電話から、素晴らしい人の縁が生まれたのですね。

山川 いろいろな方との縁にとっても感謝していますが、竹内さんは間違いなく、私にとってのキーパーソンの一人ですね。

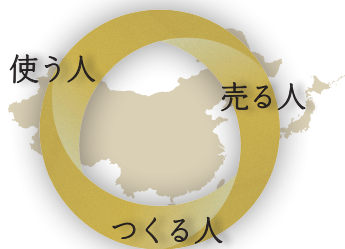
奥田 これまで山川さんは精力的にアントレプレ

ナーシップ教育に取り組んでこられましたが、今後はどのようなことを目指していかれそうですか。

山川 チェンジメーカー・メーカー、つまり世の中を変える人をつくりたいですね。そういう良質の起業家が増えれば、それだけ世の中の課題を解決してくれるはずですから。

奥田 本日は、とても興味深いお話を聞くことができました。これからも元気いっぱいでご活躍ください。

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN
http://www.bcn.co.jp/